

大内 典 (著) 『仏教の声の技——悟りの身体性』



A5判、310頁、2016年3月、
本体 3,500円、法蔵館

葛西 賢太

協会監事、宗教情報センター研究員、
上智大学グリーンケア研究所客員所員

よい仏教法要は、高度な身体性をそなえた、総合芸術だ。僧侶のととのった装束や優れた所作、寺院の荘厳が灯明の光に照らされて目を喜ばせ、いっぽうでは訓練され整えられた読経や声明の声が肌から染み入ってくる。聞き慣れ唱え慣れている人は、口ずさんだり唱えたり、心の中で拍子をとったりもする。よい仏教法要であれば（死者のためにもよいかも知れないが）まず、生者のわれわれにも見どころ聴きどころ味わいどころがあるものだ。

本書は、声と身体が仏教でどのように体験されてきたかを、主として平安期から鎌倉期にいたる天台宗系の実践に、現代の真言や修験道の事例を加えて描き出す。声明、読経、念仏や唱題や真言の反復読誦の音楽性とその意味に焦点を当てる。著者は音大のピアノ科の出身なのだが、修験道のゆたかな音楽性に触れて研究することになり、ロンドン大学のアジアアフリカ研究大学院（SOAS）で、本書のもとになった博士論文をとおして博士号を取得されたという。密教修行者として「四度加行^{しどけぎょう}」をおえてもいる著者の、当事者としての視点も本書の中に反映されている。その結果として、本書は、これまでの仏教のさまざまな研究を踏まえつつ、芸能としての声の文化が仏教においてどのように専門的に深化し、同時に人々に声がどのように身体に体験されてきたかを

文献で追及するとともに当事者として確認もするという、人類学的なエスノグラフィーにもなっている。

仏教の研究というと、文献学的な研究、哲学思想的な研究、歴史的な研究、そして仏像や仏画などの図像学的・芸術史的研究はかなりの蓄積があるが、実は近年、仏教芸能という「形のないもの」の研究が注目されている。声・音という形のないものを楽譜（当時は「博士」と呼ばれる記譜方式があった）に記録するが、楽譜には記すことのできない音楽性や即興性や技術が、仏教の味わいを深めて参列者に法悦をもたらし、さとりと浄土とはこのようなものであるかと想いをいたさせ、いっぽうで演者には更なる技術的な深化を動機づける。仏教芸能に聴き手が感動「しすぎる」様子を危ぶんで、禅僧・虎関師錬^{こかんしれん}は、その「娯楽性」をわざわざとりあげて批判したりしなければならなかったほどである（3頁）。

だが仏教芸能は娯楽どころか、実は日本仏教のあり方にとって深い意味をもってさえいると著者は述べる。著者がとりあげるのは、日本仏教の特徴としてしばしば言及されてきた天台本覚思想だ。山川草木も仏性を持ち、生きとし生けるものはほんらい最初から悟っているという強い現実肯定の主張は、永

遠に近い期間を生まれ変わりが修行した結果として始めて人は仏になることができるという大乘仏教の考え方と対立する。天台宗の開祖の最澄は、ライバルである徳一の後者の主張を批判して前者の立場をとった。最澄と徳一の論争は、最初から悟っているのならそもそも戒律や修行の意味はなんなのか、という根源的な問いを日本の仏教に提示した。何度も生まれ変わって、この身を捨てて成仏するのではなく、仏教と出会ったいま、この身体をもって成仏できる（即「身」成仏）、そしてこの身体を磨き上げ、美的にも優れ身体にも実感できる宗教実践を工夫することにより、人間はこの世にあって仏となることも可能だ、という主張。そのための宗教実践の工夫が鎌倉新仏教（念仏、参禅、唱題……）であるともいえる。

本書は多くの事例を検討する。天台宗の重要な思想家である智顗の瞑想論における身体の論じ方、法華懺法という法会の芸術性、空海と最澄の即身成仏思想の比較、日本の天台宗の思想家としての安穩によるさとりのための声・音の理論、密教修法における真言を反復する念誦の教学的理解と修法者の実感とのズレ、日本における念仏思想を体系化して定着させた源信による観想念仏と称名念仏、念仏共同体の設立、修験道における声の技法（法螺貝や「慙愧懺悔六根清浄」のような唱え言など、修験道も豊かな音楽性を持つ）など、多くの事例を扱う。これらを一連のテーマとして論じられるのかと疑問を感じる方もおられるだろう。だが、これらはみな、天台が生み出す三つの流れに帰するのである。天台は、浄土系の宗派を生み、法華（日蓮宗）系の宗派を生み、また密教実践を展開していく、それぞれの流れのなかにある。三つの流れは、最澄が発した最初の問い、この身体をもつての成仏が可能なのか、という問いに還る。著者の議論のいくつかをとりあげてみよう。

たとえば智顗の『摩訶止観』は多様な仏教瞑想の諸体系を俯瞰総括する大著であるが、精読すると、智顗は瞑想する身体に重点を置いて緻密な考察を行ってきたことがわかる。たとえば坐禅に没頭しすぎ

て体調を崩す「禅病」にどのように注意したらよいか、なってしまったときの対処法など（58-60頁）。禅病対応としては、後世になって白隠が提案した「軟酥の法」は広く言及されるが、智顗が瞑想者の身体についてよい関心をもっていたことを知らない人は多かろう。

空海と最澄の思想や実践を比較すると、現代の日本人は、どちらかというと空海のほうに軍配をあげてしまうのではないだろうか。だが即身成仏の思想の具体性において、最澄にも見るべき独創性があると著者はいう。声を通して人は悟ることができる、というのは維摩経以来の仏教の基本的な考えになっているが、それを具体的に述べるかどうかは論者による。空海が語る即身成仏は密教修行をした僧を対象とするもので、議論も抽象的である（27頁）。しかし最澄は欲望の源泉たる六根（目耳鼻舌身意）を持つ人間がこの身をもって法華経の力で成仏することができる（20-21頁）。法華懺法はその「法華経」の力の具体的な応用で、美しい読経のパフォーマンスに聞き惚れている聴衆は、これを通してさとりとはどのようなものかを想像することになるのである（104頁）。

源信は、『往生要集』ほかの著作において、念仏には二つの方法があると述べている。詳細に仏や浄土の姿を観想するビジュアルイゼーションとしての観想念仏と、阿弥陀仏の名号を口に唱える口称念仏。著者によれば、この二つは同じ扱いではなく、実践的観点からまた行としての容易さから、源信は口称念仏をより重視している（195-206頁）。そして源信はさまざまな講（念仏の共同体）をつくる。そのひとつ、二十五三昧会はふだんから念仏のための集まりをもつ結社的な仲間が、お互いの臨終には立ち会って皆で念仏を唱えながら送る、という、ターミナルケアとしてとても興味深い事例である（215-229頁）。著者は密教修法者でもある。密教の基本的な修法の構造をとりあげながら、教義上は観想が重視されるいっぽうで、修法者たちの実感としては念誦のもたらす身体感覚に重要性を感じている指摘も行っている（166-169頁）。観想はもちろん修法者の体験を方

向づけるのだろうが、教義書を読むだけではこのような側面は見落としてしまうだろうことにも目を向けるべきだと、著者は述べるのである。

著者は、音楽学という第一の足場を持ち、そこから音声のパフォーマンスという視点をもって、仏教芸能についての先行研究をひとつひとつ吟味していく。古典的な思想研究では、おそらく実際の法要を執行し臨席した者たちの体験を知るのには偏りがある。著者は歴史的な事例を取り上げながら、念仏や声明などの一般実践者の共同体、専門演者の共同体のあり方にも注目し、思想を再吟味する。

本書の事例はかなりていねいに説明されているのだけでも、実体験やある種のスキルがないと想像が及ばない事柄が扱われていることは否みがたい。たとえば、読譜能力のない評者には、著者が感じておられるであろう音楽性が楽譜や「博士」の説明からおそらく十全に理解できていないもどかしさがある。あるいは、密教修法の構造はおそらく修法をするものしか知らないことが多くあり、そうでないにしてもかなり綿密に修法の実際を見届けながら追わないと本書の記述は実感をもってわからないだろう。

現代の事例を挟みながら、また現代を生きる仏教者として、歴史的な事例に思いを馳せながら身体性を吟味していく研究手法は、もちろん、限定された資料しかない歴史的な事例を推論で埋める難しさをはらむ。仏教学者の末本文美士は、現代的な漢文読みが唐代や宋代の禅籍を理解する上で障害となることを指摘しているが¹⁾、平安期や鎌倉期の人間が現代人と身体の用い方が違うということも考えられる。

だが、ここでは、このような限界を承知しつつの、

本書の挑戦として受け止めたい。著者が、文献と先行研究の慎重な解読と、歴史的な記譜法の研究からの推論とあわせ、文書として形に残されているものだけを踏まえるのではなく、著者自身の身体感覚を統合して研究しようという意志を読みとりたい。このような著者の姿勢は、たとえば、「まえがき」で、日本の宗教研究・仏教研究の成果を評価しつつ、以下のように述べられている。

世界規模の比較文化研究の中で彼の地の学問世界が培ってきた知見には、たとえそれが「西欧中心主義」の「知的帝国主義的」性格を帯びる危うさを一方でもつものであっても、やはりみるべきものがある。イギリスの大学で PhD の学位を取得する課程で、筆者は日本型の緻密な研究と欧米型の立体的な理論的枠組みをもって事象を分析していく手法双方の利点をみた。その実感に基づき、本書の論述も両方の手法を意識している (ix 頁)。

現代の事例に焦点を当てれば、映像人類学的な手法はすぐにでも生かせそうだ。しかし評者の私は、現代というときから解放され、いまがいつなのかを忘れる体験として味わった。念仏や読経をきいて随喜讃歎し信心を鼓舞された、いまは世に亡き聴衆たちが召喚されているようにも感じられて、「この経を聞くときに、生々の業苦を離れて、善根増長す」(106-107 頁) とはこのような体験ではなかったかと想像し、数世紀遡る儀礼にいまここで立ち会っているような驚きを味わった。仏教の声の技のすごさを実感させてくれた著者に感謝したい。

1) 末本文美士『日本仏教の可能性——現代思想としての冒険』2011 年、新潮文庫、163 頁。